

やっぱり「おばあちゃん」が大好き

おばあちゃんは、おじいちゃんが死んでからは、ぼくの家の近くに一人で暮らしています。

おばあちゃんの名前はカタカナでウメノと言います。おばあちゃんは、「昔は、カタカナの名前が多かったんだよ。」と教えてくれました。ぼくはひそかに、おばあちゃんが笑うと、顔がくしゃくしゃになり、梅干しみたいになるのでぴったりな名前だと、思っていました。



小6年・大野博幸くん作

おばあちゃんは「昔は、リレーの選手だった。」とよく言うけど、ぼくは信じていません。だって、ぼくより歩くのが、うんと遅いからです。

時々、ぼくと妹をまちがえることがあります。ぼくが近づくと、「あつ、お兄ちゃんだったね。ごめん、ごめん。」とあやまってくれますが、

本当は、心の中で「男と女をまちがえるなよ。」と思っていました。

一緒に買物に行った時、ぼくは普通の声で話しているのに、おばあちゃんは、とても大きな声で話します。まわりの人がジロジロ見るので、とてもはずかしかったけど、ぼくも最後は大きな声で話さないと、おばあちゃんには聞こえません。

おばあちゃんの足や目や耳は、長い間ずっと使ってきたので「少し疲れてきてるんだらうなー」と思いました。

それから何年かして、おばあちゃんは、脳けっせんという病気で入院しました。

退院してからは一人暮らしが少し不自由になったので、ホームヘルパーという介護



小6年・大野博幸くん作

の専門の人に来てもらうようになりました。ぼくたちも心配なので、日曜日には必ずおばあちゃんの家に行くようになりました。

ある日、おばあちゃんが「肉じゃがを作ったので、食べにおいで。」と言うのでひとりで行きました。おばあちゃんの手料理は、とてもおいしいので、楽しみにして行きました。

でも、その日の肉じゃがは、とてもしょっぱくて、いつもの味とぜんぜん違うので、びっくりしました。おばあちゃんが、にこにこして「おいしいかい?」と聞くので、ぼくは我慢して「うん」と答えました。

おばあちゃんは、砂糖と塩を間違えたのです。

それ以来、少しずつおばあちゃんがおかしくなりました。同じ事を何度もいったり、ごはんを食べた事も忘れることが多くなりました。

病院に行ったら、「認知症」という病気だと診断されました。ぼくは、とても悲しかったけど、「おばあちゃんは、ひどくなってほしくないな」と思いました。

お父さんやお母さんは、おばあちゃんの困った話ばかりするので、ぼくは逆におばあちゃんのいいところを探そうと思っています。なぜなら、おばあちゃんが元気だった頃に、いつもぼくにこう教えていたからです。

「人には必ずええ所がある。それを見つけると、みんなが仲良くなれるんだよ」という言葉です。

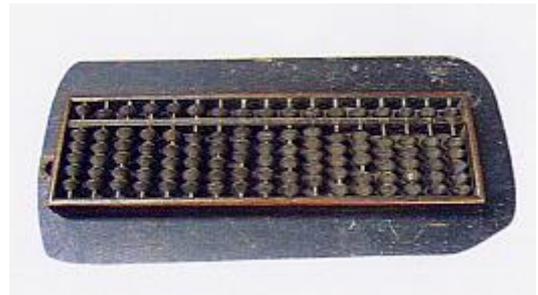
だからぼくは、おばあちゃんのいいところをたくさん探しました。

おばあちゃんは、誰に編んでいるのかは忘れてしまうけど、誰よりも編み物は上手です。

おばあちゃんは、人の顔や名前は忘れてしまうけど、「ありがとう」という感謝は絶対に忘れません。

おばあちゃんは、電卓は使えないけど、ソロバンは上手に使えます。

おばあちゃんは、忘れてしまった知識も多



いけど、役立つ知恵は、若い人よりたくさん知っています。

ぼくが会いに行くと、いつも顔を梅干みたいにくしゃくしゃにして、とても喜んでくれます。

ぼくは、これからもおばあちゃんのいいところを探し続けていこうと思います。

「認知症」という病気になってしまったことは悲しいけれど、それでもぼくは、やっぱりおばあちゃんが大好きです。

◎ 参考にさせていただいた本

「いつだって心は生きている」

— 第1章 第二話『くしゃくしゃ笑顔とや・さ・し顔』 —

大牟田市介護サービス事業者協議会

認知症ケア研究会

◎ お世話になった方

社団法人 愛媛県認知症と家族の会支部